実践報告

# タマサート大学における「おしゃべりクラブ」活動報告

大熊　伊宗・千石　昂

要　旨

筆者らは、2016 年春学期に SEND（Student Exchange Nippon Discovery）プログラム[1] でタイのタマサート大学に派遣され、タマサート大学教養学部日本語学科において「おしゃべりクラブ」と題した課外活動[2] を行った。この活動の目的は、筆者 2 名の「日本語教育を専門としながら教師ではない」という立場を生かし、学習者に日本語での自由な会話の機会を提供すること、日本語学習に関する相談に乗ることの 2 点であった。ポスターなどで参加者を募った結果、60 名という予想を上回る参加者が集まり、カジュアルな場での会話活動に対するニーズの大きさを示すとともに、日本語学習に関する多様な声を聞くことができた。

キーワード
SEND　JFL　ニーズ　会話活動

## 1. はじめに

筆者らは、2016 年の夏に SEND プログラムでタイのタマサート大学に派遣され、13 日間にわたり同大学教養学部日本語学科で日本語教育実践を行った。派遣先で筆者らが行った活動は、文法、日本文化事情、現地の大学院生との交流、課外活動など多岐にわたる。本稿では、課外活動の 1 つである「おしゃべりクラブ」と題した実践を報告する。

## 2.「おしゃべりクラブ」とは

筆者らは、活動の空き時間を利用し、課外活動として「おしゃべりクラブ」を行うことを企画した。「おしゃべりクラブ」とは、授業とは異なるカジュアルな日本語会話を主旨とした活動である。

### 2.1　企画と準備

筆者 2 名は、学習者と同じ学生という立場であった。この特徴は、普段の教室活動とは異なるカジュアルな会話活動において生かされると考え、「おしゃべりクラブ」という自由な会話を主旨とした活動を企画した。過去の派遣学生の報告[3] からも、こうした会話活動に対する現地の日本語学習者のニーズは大きいと思われた。

企画の段階では、放課後の 90 分の空き時間を利用し、20 名ほどの参加者を想定して準備を進めた。活動計画をまとめた後、筆者らが作成したポスター（図 1）と、現地の先生

方、バディ[4]の協力のもと、参加者の募集を行った。主な対象者は、日本語レベルを問わず同大学の 2 年生または 3 年生とし[5]、事前に連絡を取り合っていたバディには、直接参加を依頼した。

募集の結果、参加を希望する学生は予想を大きく上回る 60 名程度となり、その中には 1 年生や副専攻の学生も数多く含まれていた。参加人数の制限も可能ではあったが、出来る限り参加の希望に応えたかったため、より多くの人数に対応可能となるように当初の活動計画を調整した。具体的には、3.2 を参照されたい。

### 2.2　活動の概要

活動計画の調整や現地での日程調整の結果、「おしゃべりクラブ」は、日程の異なる学生の希望に合わせ、2 日に分けて行うこととなった。1 日目は 7 名の参加者を対象に、2 日目は 54 名の参加者を対象に、ともに 90 分の活動となった。参加希望者の授業スケジュールとの関係で、2 日目に圧倒的に多くの学生が集中する結果となった（表 1）。

最終的な活動の目的は 1）学生という立場を共有する筆者ら自身が会話のリソースとなること、2）日本語教育を専攻する筆者らが学習者の日本語学習に関する相談に乗ることの 2 点に設定した。

表 1　参加者人数とその内訳

| | 1 日目 | 2 日目 |
|---|---|---|
| 参加者数 | 7 名 | 54 名 |
| 参加者の内訳 | 2 年生 3 名<br>3 年生 2 名<br>バディ 2 名<br>*全員副専攻 | 1 年生 23 名<br>2 年生 26 名<br>3 年生 2 名<br>バディ 2 名<br>*うち副専攻 6 名 |
| 活動時間 | 90 分 | 90 分 |

図 1　募集用ポスター

## 3.「おしゃべりクラブ」の実践

### 3.1　活動の流れ

活動は以下の流れで行った。1）お互いの自己紹介、2）参加者の日本語学習上の困難点についての質疑応答、3）自由な質疑応答。

なお、2 日目の活動では、発音学習リソース Japanese Pronunciation for Communication[6] を紹介し、質問を促す時間をとった。具体的には次節を参照されたい。

### 3.2　活動の工夫

活動を活発なものとするため、また、参加者間の日本語レベルの差による発話機会の偏りを減らすため、以下のような工夫を行った。

第一に、日本語学習に関する質問を準備した。参加者から自由に話題を出す形式では、かえって発話が引き出しにくい可能性があり、「自由な会話活動」として活動を生かすためには、会話のきっかけとなるものが必要だと考えたためである。

第二に、バディにファシリテーターを依頼し、通訳などを行ってもらった。参加者の中には日本語を副専攻とする学習者も多く、このような配慮が必要だと考えたためである。

これらに加え、2 日目の活動では、発音学習リソースの紹介を行うことにした。実施者 2 名で会話活動を活性化させるため、共通の話題を提示し質問を促すことが有効に働くと考えたためである。同学習リソースは、無料のオンライン発音学習コースであるという点、1 日目の活動で、聴解などの問題を抱える学習者が多かった点を踏まえ選択した。

さらに、使用教室の制限や時間の制約を踏まえ、参加者を 2 グループに分け、各グループに筆者 2 名が別々に入ることで、これに対応した。実際の活動時の参加者の配置などを図 2 に示した。教室内の椅子や机は動かすことが難しく、特に 2 日目は一部の参加者との距離がやや遠くなった。そのため、筆者らが図 2 に示した●の位置に留まらず、適宜移動することによって、発話機会の偏りが出来る限り生じないようにした。

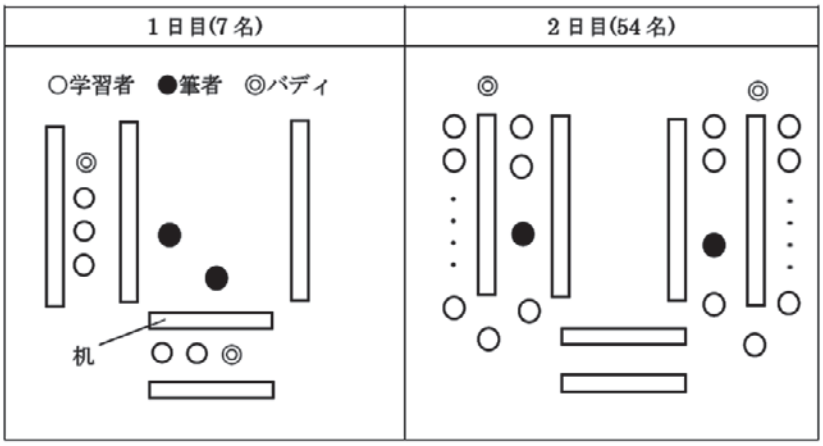


図 2　活動時の参加者の配置

### 3.3　参加者の反応

日本語学習に関する話では、はじめは学習項目に関する話題が中心であったが、自然に学習環境の話題へと移っていった。

まず、学習上の困難を感じた学習項目についてである。挙げられた学習項目は多岐にわたったが、特に顕著だったのは漢字の書きである。「私たちはみんな夢に漢字が出てきます」などという冗談を言うほど、苦手意識が強いことを教えてくれた。

次に、学習環境についてである。タマサート大学の日本語教育の特徴を、テキストや試験などを見せてもらいながら聞いた。また、「どのような授業が好きか」という話題においては、筆者らの学生という立場のおかげで、現地の学生が授業や教師にどのようなものを期待しているかについて、率直な意見を聞くことができた。

日本語学習に関する話題の後は、筆者らが学生生活に関する質問を投げかけたことをきっ

かけに、幅広く話が拡がった。具体的な話題としては、食文化の違いや日本のアニメ・ドラマといった話題のほか、中等教育における教育内容の違いや、自殺者の数とその主な原因の違い、職業選択などである。特に、職業選択については、通訳として日系企業に就職することを希望する学生が非常に多く、それが学習モチベーションとなっている学生も多かった。一方で、日系企業に比べ収入の少ない日本語教師を希望する学生はほとんどいなかった。

こうした多様な話題を通して、日本語レベルに関係なく、「日本語で会話したい」という参加者の強い意欲がうかがえた。また、はじめはバディの通訳に頼る参加者も多かったが、話題の拡がりとともに徐々に会話に慣れていくといった変化も見られた。

最後に、活動後の参加者との交流について述べる。活動後、参加者の一部に誘われ、バディを交えた 10 名ほどで夕食を共にすることとなった。活動中の発話が少ない参加者が中心だったこともあってか、はじめは緊張している様子が見てとれた。しかし、学習に関する話をするうちに日本語の使用に積極的になり、徐々に会話に慣れていくといった変化があった。話題についても、活動中と同様、学習に関するものから徐々に日タイの文化、個人的なものへと拡がった。

### 3.4　成功要因

参加人数の多さに加え、実際の参加者の声、活動後の参加者の様子から、授業とは異なるカジュアルな日本語の会話活動に対するニーズの大きさがわかる。本節では、そうしたニーズの背景と、「おしゃべりクラブ」の成功要因について考察する。

まず、ニーズの背景として、日本人との接触場面が限られている点を挙げたい。通常、参加者の多くにとって、日本語による会話機会の大半は、日本人教員を相手としたものである。「おしゃべりクラブ」は、こうした外国語環境の学習者に顕著な、日本語の会話機会に対するニーズに応えることができたと言える。これに加え、上下関係を重んじるというタイの学生の特徴も踏まえると、筆者らが、教師ではない年齢の近い学生という立場であったことは、特にカジュアルな会話活動を行う上で有効に働いたと考えられる。

また、空間的に近い距離で話ができたことで、授業などでは難しいであろう学生の声への丁寧な対応ができた点も重要であった。特に学習項目に関する話題では、授業中、教師として質問に答えるのと比べ、時間的・精神的にも余裕をもって対応することが可能となった。この点が、タマサート大学の日本語教育事情、留学や日タイの文化などの多様な話題を引き出すことに繋がった一要因だろう。

さらに、話題の展開を振り返ると、主に会話のきっかけ作りとして行った活動の工夫は、意図通りに機能したと言えるだろう。日本語学習に関する質疑応答をきっかけとして、幅広い話題に繋がるという流れが生まれたためだ。

こうした成果の一方で、実習生 2 名という限られた人数、また時間的な制約もあったため、結果として学習者のニーズに十分に応えられたとは言えない部分もある。具体的には、一人ひとりの学習者の発話機会が少なくなってしまった点が挙げられる。活動後に継続して交流を行ったことで、徐々に会話に慣れていく学習者の例を踏まえると、特に日本語の会話に慣れていない学習者のために、より多くの時間・機会を活動の中で確保するためのさらなる工夫が今後の課題である。

## 4. 結び

本稿では、「おしゃべりクラブ」と題した会話活動について報告した。総じて、日本語教育を専攻しつつ、教師ではないという筆者らの立場が、カジュアルな場で日本語を話したいという現地の学習者のニーズと一致し、多様な声を引き出すことに繋がったと考えられる。また、今後日本語教育の専門家を志す筆者らにとっても、学生の立場から海外の日本語学習者の声を聞く機会は非常に貴重であった。日本語教育に関する専門知識を身に付け、単なる会話相手以上の役割を担っていくために、この経験を生かしていきたい。

最後に、まだ学生の立場である筆者らが企画した「おしゃべりクラブ」が、「日本語で会話したい」という海外の日本語学習者のニーズと合致した点を強調したい。この事例は、学生でも海外の日本語学習者のニーズに応えることが可能であることを示唆している。そこで、学生が参加できる、SEND プログラムのような海外大学との提携プログラムをより充実させることは、海外日本語教育を活性化するための一つの手段となると言えるだろう。

## 注

1 SEND プログラムについては、宮崎・川上（2015）を参照されたい。
2 課外活動では、実習生がテーマ設定から計画までを自由に行う。今回の派遣では、2 種類の課外活動を実施したが、何れも事前スケジュールには含まれない活動で、筆者らから企画立案を行ったものである。参加者の募集や企画の調整段階では、現地の先生方、バディの協力を得て、最終的には同大学の日本語学習者を対象とした自由参加の活動として実現に至った。
3 SEND プログラムの一環として履修が義務付けられている「海外実践 A」では、派遣前教育の一つとして過去の派遣学生からの報告が取り入れられている。詳細は鈴木（2015）を参照されたい。
4 バディとは、滞在中筆者らと行動を共にし、サポートする役割を担っていた学生である。計 3 名おり、いずれもタマサート大学教養学部日本語学科の学生であった。
5 タマサート大学では、入学時点で中等教育機関での日本語学習経験がある学生とない学生が存在する。クラスは主にレベル別に分けられ、初級でも同じクラス内に既習者と未習者が混在する。「おしゃべりクラブ」では、大学という機関での学習状況や学習ニーズをとらえるため、既習・未習問わず、大学での学習歴が 1 年以上の学生（つまり、2 年生以上）を主な募集対象とした。
6 オンライン発音学習リソース Japanese Pronunciation for Communication についての詳細は、次のウェブサイトを参照されたい。https://www.edx.org/course/japanese-pronunciation-communication- wasedax-jpc111x

## 参考文献

宮崎里司・川上郁雄（2015）「SEND プログラムを通して求められる能力とは―日本語教育とグローバル化―」『早稲田日本語教育学』18、pp. 1-8
鈴木伸子（2015）「SEND 海外実習における派遣チームの変容とメンバーの成長」『早稲田日本語教育学』18、pp. 9-14

（おおくま　ただむね　早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程）
（せんごく　こう　早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程）